「居場所」はどのように達成されているか?
―フリースペースにおける若者支援の実践事例をもとに―

How Is "Ibasyo" Attained ?
―Based on the Case Study of the Youth Support in Free Space―

滝口 克典｜Katsunori TAKIGUCHI

Now in japan, the youth are exposed to many sorts of risks. To support them, we can offer "ibashyo (a community for the persons concerned)." The former sociology defines this "ibasho" as follows: an environment of intimacy with others, and open time –space with looseness. It is in this ambiguous and secure place that the youth can recover their identities from their own damages and have a great step toward reconstructing themselves. However, this "ibasho" has been thought to be ambiguous, so we can't avoid the increasing degree of plurality and interminglement of many categories. If the degree grows excessively, the definition of "ibasyo" will be lost, –a community of homogeneity and intimacy. How do supporting members deal with these two seemingly contradicting requirements for "ibasyo" –as both a community and a public space? Based on the case studies mentioned here, I state how the supports of "ibasho" decrease its complexity of the space and succeed in including a great variety of people.

Keywords:
居場所、公共空間、カテゴリー化、キャラ
ibasyo, public space, categorization, chara

1. はじめに

1990年代半ば以降、それまで若者に安定した仕事や地位への接続を保障していた「戦後日本型青年期」(乾2010)と呼ばれる移行のしくみが機能不全に陥り、排除・孤立のなかで困難を抱え、存在論的不安に見舞われるようになった人びとが急増した。彼／彼女らはその都度「不登校」「ひきこもり」「ニート(若年無業者)」「スネップ(孤立無業者)」「非正規」などと名指され、そのそれぞれに対し、民間のさまざまな活動主体が支援の手を差しのべてきた。こうした若者支援の諸活動は、その内容や手法、背後にある思想や価値観において非常に多様であるが、それら全般に共通して観察されるのが「居場所」の提供という支援手法である[1]。「居場所」とは、排除や差別をもたらす外的空間から逃れ、安心や承認を得ることのできるアジール(避難所)を指す。

比較的早くから「居場所」に注目してきた「不登校・ひきこもり」の支援活動に関する社会学研究は、「居場所」という支援空間の特徴を、「『遊びや隙間のある時空間で人と関われる環境』の提供」(荻野2006、p.318)と捉えてきた。そこでは、「不登校／登校」「無業／就業」をめぐる話題を回避する、支援する側とされる側の境界線をぼやけさせる、外部社会(学校や職場)を想起させるものをその環境から排除する、などといった相互行為儀礼が支援者やそこに集う若者たちによって遂行されている。「居場所」で用いられているこうした相互行為の技法は、「パッシング・ケア」(佐川2006)または「カテゴリー化の抑制 Managing Categorization」(Ogino2004)として概念化され、把握されてきた。かくして、行為者の役割や時空間の構成が曖

昧なままに保たれた環境のなかで、若者たちは、「不登校」「ひきこもり」などのカテゴリーにまつわるスティグマ（不名誉）を露呈させられることなく、「安心」や「楽しさ」を感じながら、創傷したアイデンティティの修復や再構築に踏み出せるのだという。

そうした曖昧な場は、当然ながら、参加の資格・要件として個々の属性や所属を問わないということと親和的である。このため、「居場所」の多くは、「不登校」「ひきこもり」などに限定されないカテゴリーの多様性や複数性を必然的に胚胎していくようになる（貴戸2005、荻野2008、佐川2009）。これまでの「居場所」をめぐる社会学研究においては、「居場所」を、特定のカテゴリーに属する同質的な人びとから構成された場として、つまり、その共同性において捉える見かたが一般的であったが[2]、上記の点を踏まえるなら、「居場所」を多様性において捉えることも可能である。齋藤（2000）は、政治思想家ハンナ・アレントの公共性論（Arendt 1958=1973→1994）を参照しつつ、人びとが形づくる集まりについて、同質的で均一的な価値がそこで支配的であるような共同体というありかたと、そこに価値の多様性や複数性が存在する公共空間というありかたとを区別した。とすると、「居場所」には、共同体としての側面だけでなく、公共空間としての側面もまた存在しているということになる。

こうした観点から見たときに、「居場所」の課題となるのは、その場に力を及ぼしている二つの契機、すなわち公共性と共同性とをどうバランスさせ、両立させるか、という難問である。そもそも、ある場所が、存在論的不安にさらされる若者たちにとって「存在論的な足場」または「承認の共同体」として存立するためには、そこが外部社会から一定程度隔離され、流動性や複雑性の縮減された時空間—むきだしの他者と直接的に向き合わずにいられる場—である必要がある。このため、公共空間の要件である多様性や複数性は、そのような場に参加する人びとの間に軋轢や葛藤をもたらす。それらが過度に高じれば、その場所の居心地は悪化し、若者たちが「安心」や「楽しさ」を感じられるという「居場所」の要件を満たせなくなってしまうだろう。一方で、それらが過度に抑制されれば、そこは他者性や多様性を意識せずに心地よくまどろんでいられる自慰的な場へと陥ってしまうだろう。そこにあるのは、閉鎖性（カルト化の危険性）や冷却性（目的を喪失しその場に滞留する危険性）といった共同体の弊害（古市2010）である。

しかしながら、多くの「居場所」は現実に分裂・解体してしまうことなく、独特の秩序を備えたコミュニケーション空間として達成され、排除された若者たちを包摂する場として機能している。では、「居場所」においては、これら二つの相反する要請がどのようなやりかたで調整され、その両立が達成されているのであろうか。この問いを考察することは、「居場所」の提供という支援方法の他の手法にはないユニークさ、つまり「居場所」という支援空間の本質が何であるのかを明らかにしていくことでもあるのだが、先行研究では、共同体としての「居場所」の記述・分析に注力してきたあまり、公共空間としての「居場所」を捉える観点が希薄で、それゆえに、そうした方向への本格的な探求は未だなされていないといってよい。

そこで本稿では、この問い—「居場所」はそれが擁する多様性と同質性とをどのようにバランスさせているのか—について、事例に基づいて考察していきたい。事例としては、多様性や複数性をより強く宿していると考えられる「居場所」が相応しい。そこで、「不登校」「ひきこもり」「ニート」など特定のカテゴリーに限定せず、「属性の如何を問わず、誰でも参加可能」という対象設定のもとで支援実践を行っている「居場所」の事例をとりあげ（2節）、そこではどのようなコミュニケーションが行われているのか、そのありようがどのように「居場所」の達成に貢献しているのかを記述する（3節）。しかる後に、「居場所」で発達したそのような独特の方法が、現代日本の「ふつうの若者たち」のコミュニケーション文化という社会的文脈に置かれたときに、どのような意義や課題をもっているのか（4節）、そしてそのようにして得られた知見には、現実の支援や制度のありかたを考えていく上でいかなる意味や効用があるのか（5節）、といった問題について考察していきたい。

2. 調査概要
—事例となる「居場所」の概要とデータ

（1）調査方法

事例として取り上げる「居場所」は、山形市を拠点に活動する若者支援NPO「ぷらっとほーむ」（以下、「ぷらほ」と

略記）が開設・運営するフリースペースである。「ぷらほ」は、「孤立しがちな子ども・若者たちの居場所づくり」を目的に、2003年4月に設立された市民活動団体である。フリースペースの開設・運営を中心に、ワークショップなど学びの機会の提供、若者向け情報誌の発行や参加型ミニコミ冊子の発行など、多岐にわたる若者支援の活動を行っている。設立・運営に携わっているのは、もと学校教員という経歴の30代男女、AとBであり、この二人が共同代表とスタッフとを兼ねている（その一人が筆者である）。フリースペースは、Aが設立当初より常勤スタッフとして運営しており、筆者（B）は不定期の補助スタッフとして「居場所」の支援実践に関与しつつ、10年以上にわたって参与観察を行ってきた。

以下では、この「ぷらほ」のフリースペースにおける諸実践を事例に、そこでどのようなコミュニケーションが行われているのかについて記述・分析していく。ある場で生成しているコミュニケーションを記述・分析するという場合、それに用いるデータをどのように収集するかが問題となる。この事例に関していうと、筆者（B）は調査者であると同時に実践者でもあり、自身がフィールドで関与している実践をとりあげて記述・分析する、そしてそうやって記述・分析したことがらを実際にフィールドにおいて試行する、という位置にある。参与観察で得られた知見を再びフィールドに投下し、それに現場がどのように反応したか／しなかったかを観察、そこから得られた知見を再びフィールドに…という、再帰的な過程のなかで、その促進役（ファシリテーター）を務めるというのが、「ぷらほ」における筆者（B）の役割である。

筆者（B）のこうした位置性や「ぷらほ」のコミュニケーションの過程を踏まえたときに、どのようなデータが調査の対象として選択されるべきだろうか。ここでは、「ぷらほ」が制作・発行してきた自己言及的なテクスト群をもとに調査・考察を進めていくこととしたい。「ぷらほ」では、支援活動の一環として、「居場所」に集う若者たちや支援者の「居場所」をめぐる自己言及的な語りを積極的に誘発し、収集し、可視化する、という取り組みが活発に行われ、その成果物としてさまざまな自己言及的なテクスト群が産出されてきた。その多くは、先の文脈からすれば、参与観察による知見の現場への再投下の過程で制作・発行され、活用されているものである。つまり、これらテクスト群には、「居場所」におけるコミュニケーションの痕跡が、地層内の鉱石のように結晶化された形で各所に散在している。したがって、これらテクスト群を用いれば、「ぷらほ」という「居場所」で交わされているコミュニケーションのありようとその推移とを追いかけることが可能となる。そこで本稿では、主に「ぷらほ」が制作・発行した自己言及的なテクスト群を資料に検討を進めていくこととし、それらをより深く理解するのに必要な限りにおいて、参与観察で得られたさまざまな情報を補助的に用いていきたい。

テクスト群のうち主要なデータとして用いるのは、同団体が2006年から2008年にかけて毎年1回制作・発行していた初心者向けの「居場所」案内冊子『ぷらっとほーむ入門』（B5判、約50頁、2008年版のみ「スタッフ篇」と「メンバー篇」の二分冊）である。この『ぷらっとほーむ入門』（以下『ぷらほ入門』と略記）は、同団体の活動、とりわけフリースペースでの日常風景を漫画形式で紹介した記事や利用者／支援者の語り、支援者どうしの対談などから構成されている。収録されている語りの大半は、筆者（B）ならびに利用者の若者たちが、活動の一環として行われた、支援者や利用者の若者たちへのインタビューを通じて収集し、編集を施したものである。

加えて、同団体には、同じ県内に存在する若者支援活動12団体を取材した『居場所の歩きかた　やまがた「不登校・ひきこもり」支援NPOガイドブック』（A5判、128頁、2009年）や、同じく県内各地の若者地域活動10団体を取材した『地域のつくりかた！　やまがたの若者たちの地域づくりインタビュー情報誌』（A5判、144頁、2010年）などの刊行物があり、必要に応じてこれらのテクストをも参照する。どちらにおいても、他のさまざまな団体の活動者たちへのインタビュー記事と並んで「ぷらほ」の支援者へのインタビューが収録されている。これらは、同団体の共同代表AとBの二人で相互インタビューを行い[3]、そのやりとりに編集を施したものである。

以下ではまず、これらのテクスト・データならびにそのもととなったインタビューのトランスクリプトを主要な資料として用いつつ、「ぷらほ」が創出している「居場所」がどんなものなのか、その全体像を素描したい。

（2）事例概要

「ぷらほ」は、山形市郊外の住宅地に位置する一軒家をフリースペースとして開放し、先述のAがスタッフとして常駐し、訪れる若者たちを迎え入れている[4]。フリースペースは、毎週水曜から金曜、13時から17時まで開所しており、そこに平均して一日に5～6名ほどの若者たちが訪れる［写真

［写真1］フリースペースの日常

［写真2］「花笠まつり」への参加

［写真3］ドキュメンタリー映画自主上映会

［写真4］コスプレパーティ

［写真5］スタディツアー「大学ゼミ体験」篇

［写真6］スタディツアー「県議会傍聴」篇

［写真7］スタディツアー「教育研究集会」篇

［写真8］スタディツアー「TUAD卒展」篇

[写真9] 体験講座:労働組合の仕事とは?

[写真10] 体験講座:アニメ作家の仕事とは?

[写真11] 体験講座:国会議員の仕事とは?

[写真12] 体験講座:演劇人の仕事とは?

[写真13] 体験講座:編集者の仕事とは?

[写真14] 体験講座:洋服づくりの仕事とは?

[写真15] NPO・市民活動ゼミ

[写真16] シネマカルチャー・サロン

1]。出入りしている若者たちは、すべて合わせると40名ほどである。彼／彼女らは利用会費として一回1000円を負担している。その所属や属性は「不登校」「ひきこもり」「通信制高校生」「フリーター」「主婦」「会社員」「自営業」「無業者」などさまざまであり、通ってくる目的や意図も雑多—例えば、「コミュニケーションの練習」や「職場と家庭以外にふらっと立ち寄る」など—である。こうした自己情報をどこまで開示するかはそれぞれに任されており、スタッフであってもそれぞれがどのような動機や所属であるかを逐一把握したり統制したりすることはない。その意味で「ぷらほ」は、支援団体というよりは、常連客の集う「喫茶店」のような趣の場である[5]。これについては、ある若者Cさん（10代·女性）の次のような語りがある。

「ぷらほ」の存在する意味は、ここに来ればいつでもあるっていう安心感みたいなものと、ここにいつ来てもよいっていう気軽さですかね。…（中略）…深刻に相談しに来る相談室という感じではなくて、顔を出せる居場所というか、自分が常連の喫茶店というか、そんな感じですね。あそこに行けば、知り合いがいて、ときどき気軽に顔を出して、そこでゆったり話ができる。（『ぷらほ入門2007』p.42.）

こうした点を踏まえ、スタッフはただ「彼／彼女が（会費負担をしてまで）フリースペースに通ってきている」という事実をもって、彼／彼女がそこを自分の「居場所」と位置づけていることの現われ、すなわち「居場所」の達成と捉えている。では、そのフリースペースでは、いったいどのような支援が行われているのであろうか。

フリースペースでは、常勤スタッフのAが、訪れた若者たちとお茶を飲みながら談笑したり、話題を提供して場を盛り上げたり、離れている若者に話を振っておしゃべりの輪につないだり、個別に相談に乗ったりと、参加者どうしのコミュニケーションを促進するファシリテーターの役割を担っている。そうしたやりとりを通じて「○○に興味がある」「△△をやってみたい」等、嗜好や欲望をめぐる語りが頻出するが、その際には、それらの実現に向けて動き出すよう鼓舞したり、具体的に手助けしたり、といった関わりをも随時行っている。

一方で、スタッフは、「学校復帰する」「正社員になる」などといった社会標準に準拠したゴールを想定して、そこに向けて彼／彼女らを水路づけしていくような関わりかたを意識的に避けている。ここでは、目的や指標が外部からもちこまれるのではなく、内部のコミュニケーションを通じて生成する。このため、スタッフの役割はコミュニケーションの活発化におかれており、やりとりを通じて浮上してきた誰かの「やりたいこと」を、自らも一緒に関わりながら、実現に向けて支援していくことにあるとされている。例えばその様子は、ある若者Dさん（10代·女性）によって、次のように語られている。

スタッフ、メンバーともに、行動力がすごい。…（中略）…「ぷらほ」の人たちは、何か思いついたらすぐに行動を起こす。その行動力の速さに、ついこちらも触発されてしまう。「口では言っていたけどやらない」ということがない。メンバーの「何かやりたい」という声に対してスタッフがフォローを入れたり、スタッフの「何かやらないか」という声にメンバーが協力したり、お互いが補完しあう形で物事が進んでいく。（『ぷらほ入門2008［スタッフ篇］』p.34.）

このように、フリースペースでは、そこで交わされるコミュニケーションを通じてさまざまな活動が生成する。そうした活動としては、次のようなものがある。すなわち、中心商店街の夏祭りイベント「花笠まつり」への参加（2007年より継続、［写真2］）、地域や社会のさまざまな活動に参加し体験学習を行う「スタディツアー」（2003年より継続、［写真5、6、7、8］）、ユニークな活動者を招いて体験学習を行う「社会参加体験講座」（2007年より継続、［写真9、10、11、12、13、14］）、地域文学や戦争、市民活動など、テーマを決めて文献を読み議論を行うゼミ形式の学習会（2008年より継続、［写真15］）、自分たちの日常や活動の風景を漫画形式で紹介する冊子『ぷらほ入門［メンバー篇］』の自主制作（2008年）、戦争体験や脱原発などを扱ったドキュメンタリー映画の自主上映会（2008～2009年、2011年に開催、［写真3］）、映画作品をネタにした語り合いの場である「シネマカルチャー·サロン」（2010年より継続、［写真16］）、イラストや漫画など若者たちの特技を生かした仕事おこし「キャラ化ビジネス·プロジェクト」（2010年より継続）、各自が衣装を自作してキャラクターに扮しそれを披露しあう「コスプレパーティ」（2010年より継続、［写真4］）などである。

どの活動にも参加する若者たちが協同で取り組むべき特定のテーマや課題、目標などが備わっているため、集まりが回を重ねていく毎に、次第に参加者の間でつながりや

仲間意識のようなものが生まれてくる。例えば、上述の冊子『ぷらほ入門[メンバー篇]』の企画を終えた後、ある若者Eさん(20代・男性)は次のような言葉を残している。

> 今回の『ぷらほ入門[メンバー篇]』企画のように、有志を集めてまた何かをやれたらと思う。自分たちで心構えをもったり、手間暇かけて準備したり、一緒に作品を観て何かを持ち帰ったり、そういうことがもっとしたい。…(中略)…こういうのは学校の日常にはない。学園祭の出店みたいなイメージ。(『ぷらほ入門2008[スタッフ篇]』p.39.)

ここには、ささやかながら同じテーマのもとに集い、一緒にそれに取り組む仲間集団という意識の芽生えがある。よって、この活動ごとの特定テーマにまつわるゆるやかな集まりのことを「テーマ・コミュニティ」と呼ぼう。

こうしたテーマ・コミュニティの多くは、「ぷらほ」が拠点をおいて活動している地域社会を舞台に、そこに存在するさまざまな社会文化の担い手たちとの協働によって実施されている。例えば、ドキュメンタリー映画の自主上映会や「コスプレパーティ」、「シネマカルチャー・サロン」などは、同じ地域で営業している市民出資の映画館やその周辺で活動する自主上映サークル、映画関連NPOなどとの協働企画である。企画は、「ぷらほ」とこれら各団体とがそれぞれの資源を持ち寄り、それらの中間に共有空間をつくりだす形で実施される。

例えば、上述の「シネマカルチャー・サロン」は、映画館との協働企画であり、映画館に併設されたカフェを会場に、上映中の映画作品をとりあげ、集まった人びとがそれについて感想や思いを語り合う場である。会場や作品を映画館の側が提供し、サロンのファシリテーターを「ぷらほ」の側が提供する形で成り立っている。そこでは、毎回約10人程度の参加者があったが、そのうち半分が「ぷらほ」の「居場所」に集う若者たち、残り半分を「居場所」の外部の人びとが占める状態が「いちばんバランスがよい」と考えられ、そうした形が目指されていた。ここからも、テーマ・コミュニティが「ぷらほ」という「居場所」の内部にあるのではなく、はたまた完全なる外部にあるのでもなく、その内部と外部とが重なり合う半・外部の空間に位置づけられているということがわかるだろう。こうしたありかたは、だいたいどのテーマ・コミュニティにも共通して見られる。

テーマ・コミュニティという中間的な場は、そこに参加する若者たちに、二方向の作用を及ぼす。第一にそこは、参加者の約半数がフリースペースに日常的に出入りしている人びとが集まるような場であるために、つながりづくりが苦手な「居場所」の若者たちにとっても参加の敷居が比較的低い。仲間や顔見知りがいるため、安心できる場となっている。しかしその一方で、同時にそこは、約半数が外部の人びとでもあるため、「居場所」の外の社会とも地続きである。人づきあいが苦手な若者にとっては、緊張感が伴う場だが、一方でそこには外の世界からの誘因も働いている。このため、フリースペースの若者たちにとってそこは、「居場所」に半身を置きながら、もう半身で外部の人びとと出会ったり、そこから社会的な活動や就労の機会を得たりできる場として機能している。例えば、ある若者Fさん(30代・男性)の次のような語りがある。

> …自分に大きく影響したのは、仕事を始めるきっかけが得られたことです。それ以前のニート状態から移行するきっかけとしては大きかったですね。…(中略)…Bさんが活動でつながった人につないでくれて、その人の職場で働くことにもなったわけです。そういう具体的な伝手を手に入れることができたというのは大きいですね。(『ぷらほ入門2007』p.45.)

ところで、個々のテーマ・コミュニティは、それぞれが互いにゆるやかに他のテーマ・コミュニティとつながりあっている。このため、あるコミュニティが目当てで「ぷらほ」の活動に参加した者が、つながりの糸をたどり、別のそれにも参加し始める、といった光景が頻出する。例えば、地域の映画サークルのメンバーであったある若者Gさん(30代・男性)は、上述の自主上映会への参加をきっかけに「ぷらほ」の活動とつながり、自らのニーズに合わせて他のテーマ・コミュニティにも少しずつ参加するようになり、現在では、仮装の交流会である「コスプレパーティ」やフリースペースの常連参加者となっている。また、そうしたコミュニティの探索や渡り歩きについては、『ぷらほ入門[メンバー篇]』制作企画の編集会議への参加をきっかけに、別の企画にも参加するようになったある若者Hさん(20代・女性)の、次のような語りもある。

> …誰に伝えるのかとかどういうことを伝えたいのかっていうのをゼロからやるってことはやったことがないということに編集会議を続けていく中でようやく気がついて、…(中略)…そういう、自分なんもないっていうのに気づけたとい

うのはすごくでかくて、自分にそういう部分がないなとか、ないからほしいとか、そういうところを、今やってるゼミとかでできるんじゃないかなと思って、そういう気持ちもあってゼミには参加し続けているということです。(トークイベント「NPOの実践に学ぶ　子どもが参画する学びとは? ～学校現場にどう活かしていくのか～」[2009年7月29日]質疑応答より)

また、若者たちの多くは、それぞれのニーズに応じて複数のテーマ・コミュニティを掛け持ちしている。こうした掛け持ちは、「ぷらほ」で推奨されているありかたでもある。そこでは、さまざまなコミュニティへの多元的帰属と、それを通じた承認調達回路の複線化が、積極的な価値として肯定的に語られている。例えばそれは、次のような支援者Aの語りに明らかである。

人との関わりが少ない人から、君は魅力的だね、と言われても全然嬉しくない。逆にたくさんの人と関わってきた人から同じことを言われるととても嬉しい。ほめ言葉は、たくさん人を見てきて、たくさんの人と関わってきた人から言われて初めて価値が生まれる。…(中略)…大事なのは分母を増やすってことだよね。周りを見ることだったり、たくさんの人と関わったり、体験を重ねることでしか分母は増やせない。(『ぷらほ入門2008[スタッフ篇]』支援者インタビューのデータより)

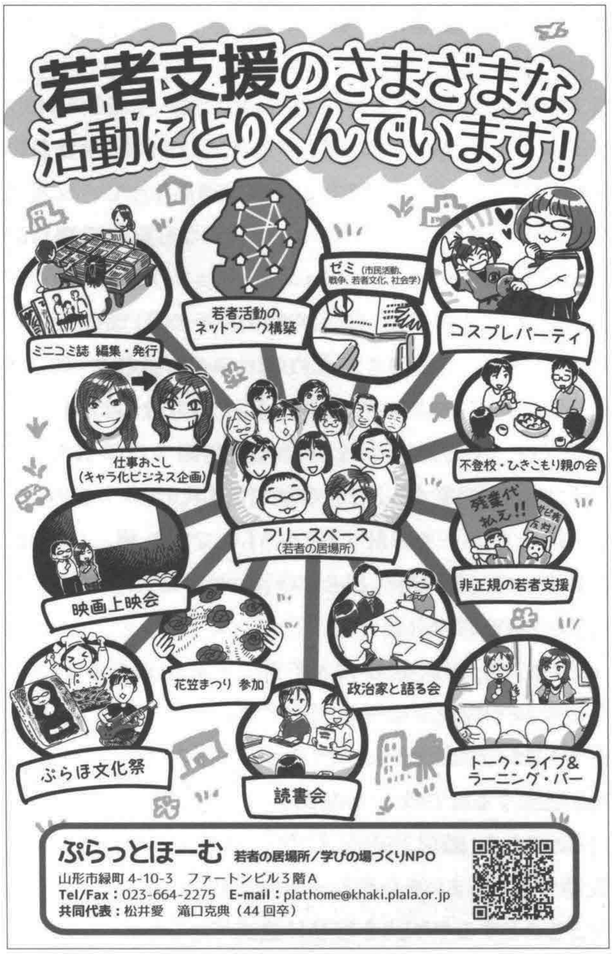
ここで出てくる「分母」とは、コミュニティへの接続や帰属という意味で用いられている「ぷらほ」のジャーゴンであり、「分母を増やす」とは、複数のコミュニティへの多元的帰属のことである。

複数化や多元化を進めていく中で、既存のテーマ・コミュニティの中に自分のニーズを満たしてくれるものを見出せなかった若者が、新しいテーマ・コミュニティを自前でつくりだそうと動き出すような場面も散見される。このことに関しても、それを積極的に肯定し推奨する語り口、「なければつくろう」が活動に関わるさまざまな場面において、スタッフやメンバーたちにより一種の定型句として用いられている。

*

かくして「ぷらっとほーむ」は、中心に「居場所」事業のフリースペースを配置し、そこから多方向に枝分かれする形でテーマ・コミュニティをあちこちに散りばめているような支援空間を、地域社会の中で展開し、増殖させていく活動を行っている(これを図案化したものが、「ぷらほ」の活動紹介において用いられている。[図1])。社会的孤立のリスクを抱える若者たちは、「ぷらほ」が地域の空間にはりめぐらせたテーマ・コミュニティのネットワークのどこか一点に接触し、そのコミュニティにまずは包摂される。やがて彼／彼女は、それをとりあえずの足場に、別のコミュニティ群へと誘われ、それらにもう片方の足をのばしていくようになり、そうすることで、複数の活動や仕事の場を地域内で確保し、彼／彼女の新しい自己を承認してくれる複数の社会的な回路を手にすることになる。

以下では、こうした「ぷらほ」の諸実践を事例に、「居場所」におけるコミュニケーションの実態をより詳しく記述・検討していきたい。



[図1] 支援空間を図案化した活動紹介のチラシ

3.「居場所」におけるコミュニケーション

はじめに分析枠組を示す。先に見た通り、「ぷらほ」のフリースペースにおいては、孤立する若者たちが「(会費負担をしてまで)通ってくる」魅力的な場が創出されている。そこでまずは、それが若者たちにとっていかなる意味で魅力的であるのか、その場でのコミュニケーションの様相について記述する。しかる後に、そうした魅力をその場に宿らせるために「ぷらほ」の参加者に求められている、独特のコミュニケーションの方法について記述する。その方法とは、第一に、「不登校」「ひきこもり」といった社会問題の当事者カテゴリーで自らを表象すること—本稿ではこれを〈当事者カテゴリー化〉と呼ぶ—を抑制するというものであり、第二に、それに代わって、〈キャラ化〉というコミュニケーション技法を用いるというものである[6]。

〈キャラ化〉とは、90年代の若者文化に由来するコミュニケーション・サバイバルの一手法であり、キャラとは、前提を共有しない人びとどうしがとりあえず当面のコミュニケーションを達成するための、その場あるいは関係性限りでの配役のことである(瀬沼2009)。「ボケ」「ツッコミ」など、キャラの要請するふるまいをなぞる—〈キャラ化〉する—ことで笑いをはじめとするやりとりを容易に達成できるため、若者たちの間で、コミュニケーションの円滑化や安定化を図るためのツールとして生み出され、急速に広まった方法である。この〈キャラ化〉の採用により、当事者カテゴリーという共通前提を封印した「居場所」にコミュニケーションによる再統合がもたらされているのである。ではこのことを事例に即して具体的に見ていこう。

(1)「常連」たちの安定的なコミュニケーション

「居場所」の特徴は、そこがカテゴリーの曖昧化された時空間であるという点にあった。だが、カテゴリカルな把握の一切がそこから排除されているわけではない。「ぷらほ」では、「不登校」「ひきこもり」などといった社会問題の当事者カテゴリーやそれに付随する「治療／回復」や「支援／自立」の物語は回避されているが、その代わりに、「居場所」への帰属度合に応じた集団内カテゴリーが、利用者を分節する際の指標として用いられている。すなわち、「新入り(初心者、お客さん)」「常連メンバー(レギュラーメンバー、メンバー)」という分類であり、これらに基づき、「ぷらほ」の人びとはそれぞれとどのように関わるかを判断している。

では、そこでは一体どのようなコミュニケーションが行われているのだろうか。まずは「居場所」で達成されているコミュニケーションの独特の秩序について見ていきたい。「ぷらほ」の日常を構成しているのは、スタッフと利用者、あるいは利用者どうしの「おしゃべり」や「雑談」である。ある利用者の若者Iさん(20代・女性)はこれを次のように言語化する。

> ぷらほの日常でやっているのはだいたい雑談が多い。特に決まったテーマがあるわけではなく、そのときに集まったメンバーが話題を持ち寄ったり、Aさんを中心に話題が広がったりする。(利用者インタビュー2010/5/13)

しかし、そうしたやりとりに誰もが最初から支障なく参加できるわけではない。「ぷらほ」の日常生活においてコミュニケーションの中核を担っているのは「常連メンバー」の人びとである。彼／彼女らは、上述した金銭負担をしながら、「ぷらほ」に通い続けている人びとである。彼／彼女らは「ぷらほ」において推奨されている行為規則を習得したものと捉えられており、その間では比較的安定的なコミュニケーションが達成されている。例えば、若者たちの次のような語りがある。

> 利用者Jさん(10代・女性):最初に来たときは…(中略)…雰囲気にとてもびっくりしたんです。不登校やひきこもりの人が集まるものすごく深刻で暗い感じの場所だと思ってきたのに、なぜか『サウスパーク』上映会をやっていて、みんなげらげら笑っていて。あの場にも不登校やひきこもりの人はいたのかもしれませんが、そんなことを全然感じさせない雰囲気だったのに驚きましたね。(『ぷらほ入門2007』p.34.)

> 利用者Kさん(30代・男性):笑いがあふれる場所。計算していない笑い。無理していない笑い。押しつけられない笑い。笑いの強要がない。そんなふうに、自然に笑える居場所の雰囲気がよい。スタッフはもちろんそうだが、メンバーからもいい雰囲気が出ている。悪い空気を出す人があまりいない。「今日も一日「ぷらほ」で楽しむぞ」という人たちが集まっているからだろうと思う。(『ぷらほ入門2008[スタッフ編]』p.30.)

共通して語られているのは、そこが「笑い」や「いい雰囲気」のある、楽しい場、居心地のよい場だということである。それこそが、「ぷらほ」という「居場所」に若者たちを集わせる最大の魅力や引力を構成している。とはいえ、それらは、「友だち」のような、仲がよい間柄における親密さとは微妙に異なるものとして捉えられている。両者の差異は、「居場所」の人びとの間では「絶妙な距離」が保たれているという点にある。スタッフAやある「常連メンバー」は、このことを次のように語る。

A：…ぐっと近づいて傷つけあうだけじゃなくて、然るべき距離を取っていがみ合わないっていう賢さっていうか方法ってすごく大事で、それってベースとしてあるから、皆察知してそうなるんだよね。あまり踏み込んじゃいかんな、とか適度な気遣いをする。親しき仲にも礼儀ありっていうのが、皆あるんじゃないかなと思ってて。(『地域のつくりかた!』支援者インタビュー・データ)

利用者Lさん(10代・女性)：「ぷらほ」のメンバーとは、いい意味で、距離感を保ってつきあっていて、あまり踏み込みすぎず離れすぎずという、微妙な距離感ですね。それがあるから、過ごしやすい居場所があるのだと思う。それが、他での友だちとの場合には、もっと距離が近くなるので、言いたいことも言える、やりたいこともやれるけど、そのぶん相手からも踏み込まれるという、プラスもマイナスもある。そういう意味で、「ぷらほ」では、絶妙な距離感が保てているなって感じています。必要以上に干渉されたり、訊かれたくないところまで訊かれたりすることがない。「今何してるの」とか「学校は」とか、そういうことを訊かない。スタッフもメンバーもそうですね。(『ぷらほ入門2007』p.36.)

つまりそこでは、儀礼的な「距離」が参加者たちによって保持され、達成されているということである。しかしながら、「新入り」には、「微妙な距離」を保ちつつ「会話を楽しむ」という、上記の相互行為は困難である。例えば、「常連」ではない存在として自らをカテゴリー化しているある利用者の若者Cさん(10代・女性)の目には、「常連」たちのコミュニケーションは「ついていけない」ものとして映っている。

…久しぶりに行くと、そこにいる人たちが、自分の知らない話題で盛り上がっていて、ついていけない。…(中略)…このことは、自分だけでなく、久しぶりに訪れた他のメンバーにも、初めて「ぷらほ」を訪れてこれからメンバーになるかもしれない人にもあてはまる。そこに乗れずに外れた人にとっては居づらい場所。(『ぷらほ入門2008[スタッフ編]』p.36.)

彼／彼女らはその段階での行為課題を達成して初めて、「常連」の仲間入りをすることができる。「常連」となるには条件があるということ、そしてそのことがスタッフや「常連」の間で共有されている認識であるということは、ある利用者の若者Lさん(10代・女性)の次のような語りにも読み取れる。

…最初来たばかりの頃のWさん。いきなり距離を乱してきたり、土足でただ乗りしてきたりと、自分や周囲にとってそのキャラはきつかった。それがあるとき変わった。なぜか。「ぷらほ」では、キャラを相互調整する機会や場面があるので、不快感を他人に与えるキャラのままではいられないし、いさせてもらえない。その意味で、「何でもOK」とは決して言わない場所。(『ぷらほ入門2008[スタッフ編]』pp.31-32.)

「常連」の条件の具体的な内容に関しては後ほど詳細に検討するが、ここではまず、そうした儀礼的なコミュニケーションの方法に関係する参入障壁が存在し、人びとの間で意識されているということを確認しておきたい。ここからは次のことが言える。すなわち、「ぷらほ」では、「新入り」から「常連」への移行が利用者のたどるべき過程として想定されており、この暗黙の想定に沿う形で、利用者と支援者の相互行為が進められているということである。

(2) 人びとはどのようにして「常連」になるのか

「居場所」では、カテゴリーの曖昧さは利用者と支援者の相互行為を通じて保たれている。ということはつまり、そのどちらか一方でも相互行為を放棄してしまえば、そこでは曖昧さが崩れ、慎重に回避されていたはずの当事者カテゴリーが立ち現れてしまうということである。そうした事情を未だ把握しきれていない「新入り」は、自身の「不登校」「ひきこもり」といった創傷体験やそこから来る「生きづらさ」などを過剰に話題化したり訴え続けたりすることで、しばしば、そ

れまで保持されていた場の秩序を攪乱させる。彼／彼女らのそうしたふるまいは、スタッフAや「常連」たちによって「問題」として把握されている。例えば次のような語りがある。

A:…雑談とか世間話のなかで、なんとなしに知らない人と場を共有することができる、って大変な、大切な技術だと思うのね。必要最低限のことしか話せないとか、または振り切って、わたしリストカットするんです、とか、そんなコミュニケーションしかできないとどこに行ってもまずいべ。しゃべらないか、しゃべったらヘビーか、みたいな。(『地域のつくりかた！』支援者インタビュー・データ)

利用者Iさん(20代・女性):誰が来てもそれなりにおもしろい場所だと思う。強いて言うなら、自分の話だけを聞いてほしい人はちょっとお勧めできないかもしれない。打撃だけ与えられて帰る、ということになりかねないから。話を聞いてほしいというのが悪い訳じゃないんだけど、一方通行だとお互いに辛いと思う。(利用者インタビュー2010/05/07)

「問題」とは、「わたしリストカットするんです」のように当事者としての自己をアピールすることや「自分の話だけを聞いてほしい」という構えでいることである。このような、社会問題の被害者または当事者として自己をカテゴリー化し、コミュニケーションの資源として用いるありかたを、〈当事者カテゴリー化〉と呼ぼう。こうしたふるまいは、「ぷらほ」では、先に述べた「然るべき距離」に混乱をもたらすもの、として認識されている。例えば、利用者の若者Lさん(10代・女性)の次のような語りがある。

…はじめて来た人のなかには、距離感を上手くつかめない人もいるんですよね。その場合のAさんの対処法がすごいので、自分もあんなふうにできたらいいなと思いますね。そういうものを学びに来るというのもあります。よく見るのは、誰かが場を凍りつかせるような発言をしたときに、うまくフォローしたり、一人でいる人がいると、さりげなく話しかけたりとか。(『ぷらほ入門2007』p.36.)

さらに言うと、この〈当事者カテゴリー化〉は、「ぷらほ」で忌避される「ただ乗り」というありかたにもつながっている。「ただ乗り」とは、相互行為場面において、相手に一方的に行為負担を配分し、自分はそこから利益のみを享受するといったふるまいを意味する、「ぷらほ」のジャーゴン(隠語)である。自らを社会問題の被害者—すなわち、支援される側—として操作的に自己呈示し、相手に対し一方的にケアやサービスを求めるありかたは、その代表的なものである。例えば、次のような語りがある。

A:…コストを担う、って意味を学べる機会とか、知る機会とか、もっともっとつくっていきたいと思う。人と関われるようになる練習も必要だけど、それをクリアしたら、そこからどううまく関わっていくか、とか、ただ乗り系にならない、っていうこととか。そのただ乗り系って嫌。…(中略)…サービスよこせ、とか、スタッフなんか面白いことしろ、というふうに言われるとキツくなる。(『ぷらほ入門2008［スタッフ篇］』支援者インタビュー・データ)

利用者Mさん(10代・女性):前までは、訊かれないと喋らないみたいな感じで、自分からはっきりと話したい何かがなかったらそんなに前に出て行くようなタイプではなかったんですけど、「ぷらほ」で話してるなかで、それは相手に気を遣わせてるんだってことを知ったというか、そのことを聞いたときに「あたし、気を遣わせてたんだな」と思ったんです。それで、これからは相手になるべく労力をかけさせないように、思っていることはちゃんと言語化できればいいなと。例えば、みんなで話してるときに、「あなたはどう思う」って訊かれなくても「こうだと思うよ」みたいに言葉にする。(『ぷらほ入門2007』p.40.)

ここで語られているように、「相手に気を遣わせる」、つまり、相互行為のコストを負担せず、ただケアやサービスだけを求める、といった「新入り」の人びとのふるまいに対しては、支援者による消極的あるいは積極的な対処がさまざまな形でなされ、「常連」への移行に向けた水路づけが行われている。消極的対処としては、支援者や「常連」の利用者たちによる〈パッシング・ケア〉がなされたり、より積極的な対処としては、支援者による〈間接化された介入〉が行われたりしている。

前者の〈パッシング・ケア〉とは、「新入り」による〈当事者カテゴリー化〉をやりすごすことで、そうしたカテゴリーの成立を回避する技法である。その例としては、利用者やスタッフAの次のような語りがある。

利用者Jさん（20代・女性）：最初は、スタッフの人が自分を導いてくれて、それでいずれ外に出て行けるようになるんだろうと、受け身的なスタイルで通ってきていたんですね。でも、あるときここは違うんだって気づいた。当時はまだバイト未経験で、スタッフの人に「バイトをしてみたい」と話したら、「あ、そうなんだ」の一言で終わってしまったんですね。それで「あー、自分で探さなきゃいけないんだ」って気づいたんです。正直いうと「一緒に探そうか」とか「こんなのがあるよ」とかの動きを期待していたんですが、何もなかった。自分でやらなきゃいけないんだって思いましたね。（『ぷらほ入門2007』p.34.）

A：ベタに拾い過ぎないことが大事。拾い過ぎちゃうと、あ、この人拾ってくれるんだ、この人わかってくれるんだ、って思った瞬間に、依存関係に陥る。その危険性。（『ぷらほ入門2008［スタッフ篇］』支援者インタビュー・データ）

ここでは、利用者の「外に出て行けない無力な自分／ゆえに導いてほしい」という当事者カテゴリーを用いた訴えを「ベタに拾い過ぎない」でやり過ごしたケースが語られている。事例の利用者は、支援者が意図的に遂行したこのパッシングによって「自分でやらなきゃ」という気づきを得ている。この意味で、カテゴリー化の回避とは単なるパッシングではなく、支援活動の一環として遂行される〈パッシング・ケア〉、すなわち、やり過ごすことによって相手に何か気づきや変化をもたらそうというコミュニケーション技法なのである。

また、後者の〈間接的な介入〉とは、それが直接なされると当人が大きく創傷してしまうような批判・指摘や「ダメ出し」を、間接的な形で本人に届けるための方法である。間接性の確保としては、『ぷらほ通信』や団体のブログなど不特定多数に向けた広報媒体[7]において「一般論」の形式をとった上で「ダメ出し」をするという方法、あるいはまた、より重度の〈当事者カテゴリー化〉を行う「新入り」に対して「ダメ出し」したいときに、彼／彼女の目の前で、他の誰かのより軽度な〈当事者カテゴリー化〉へのソフトな「ダメ出し」を行うことで、彼／彼女が自らのふるまいの問題性について再考するきっかけを与えるという方法などがある。これらは、利用者の若者Hさん（20代・女性）の次のような語りのなかに確認することができる。

自分が「ぷらほ」で変わってきたことは、前よりは行動に出れるようになったってことですね。…（中略）…その気づきは『ぷらほ通信』にあって。居心地よく過ごせるのは、誰かが何らかのコストを支払ってくれているからだっていうのを、Aさんが書いていたのを読んで、それで「そっか」って気づけたんですね。…（中略）…あとは自分に直接言われたことでなくても、他のメンバーに対してAさんが「こういうときは言われなくても動いたほうがいいよ」という場面なんかを見ると「やべえ、あたしもやってない場面あるから気をつけなきゃ」と思ったり。人の姿を見て学んだ感じですね。（『ぷらほ入門2007』p.47.）

また、「ただ乗り」が「ぷらほ」では問題含みの行動であるということを「新入り」に認識させるために、「ただ乗り」の正反対にあたる「常連」の人びとの「コストを担う」というふるまいに関して、それを言葉で捕捉し、肯定的に意味づけし、同じ場にいる人びとに対して可視化するという実践が支援者によって行われている。こちらもまた、〈間接的な介入〉の技法の一例である。以下の語りは、このことをスタッフAが定式化したものである。

…コストをかけてくれた人がいれば、ちゃんと認めて労いや感謝の言葉をかける。そういうことをスタッフどうしでも大事にしている。その姿を人は見てくれている。スタッフがXさんに対して、洗い物してくれてありがとう、という声がけをすれば、Yさんが、あ、Xさん洗い物してくれてたんだ、と気づく。そういう間接的な関わりも日常的にある。いきなりYさんに、Xさんが洗い物してるから手伝ってきて、というより、間接的な言葉がけってずっと響くと思う。（『ぷらほ入門2008［スタッフ篇］』支援者インタビュー・データ）

どの方法にあっても、相手との間に何らかの媒介項を挟んだ上で「ダメ出し」を行うという点で間接性が確保され、伝えるべきメッセージは確実に届けつつも、それにより当人が被るであろうダメージを可能な限り最小化しようとの意図が働いている。スタッフや「常連」たちのこうした相互行為を通じて、「新入り」の人びとは、「ぷらほ」におけるコミュニケーションには暗黙の規則が存在するということ、場に参加する以上は自身もそれに従う必要があることなどに気づいていくようになり、次第に「常連」への移行を果たしていくことになる。

(3) 代替的相互行為手法としての〈キャラ化〉

とはいえ、〈当事者カテゴリー化〉は、寄る辺なき「新入り」の人びとが未知の場所での見知らぬ人びととのコミュニケーションに踏み出すにあたってのなけなしの一手でもあったはずである。それを禁じられてなお彼／彼女らがコミュニケーションに踏み出せているのだとすれば、そこでは、〈当事者カテゴリー化〉とは異なるやりかたで、「居場所」でのやりとりの敷居を下げてくれるような、何らかの相互行為のツールが彼／彼女らに与えられているのだろうという推論が成り立つ。この観点から「ぷらほ」を眺めたとき、そこで、支援者や「常連」たちが「新入り」に対し、そのキャラを引き出して目立たせたり、相互のキャラがうまく棲み分けられるよう調整を行ったりしているのを確認することができる。これを〈キャラ化〉と呼ぼう。

キャラを駆使する若者たちについて研究した瀬沼(2009)によれば、キャラとは、コミュニケーションそれ自体が目的となっているような場面における、相互行為の円滑化のためのその場限りでの配役のことである。「ぷらほ」では、「新入り」に対し、支援者や「常連メンバー」によってキャラのもととなる属性や挿話の引き出しが行われ、それらを手がかりに人びとの相互行為が積み重ねられるなかで、次第にその人の「居場所」でのキャラが構築されていく。その様相は、スタッフや利用者の次のような語りのなかに確認できる。

> A：いろんな人が集まるから、それぞれ最初はどうしていいかわかんないと思うの。年も違うし、この人見た目怖いしとか。だけど、それってどっか突破口を見つけられればつながれたりすると思うのね。…（中略）…例えば、ゲームの話でたら、ゲーム詳しい人ここにいるっていうことでつないだり、身につけているもので、それどこで買ったの、なんていうコミュニケーションから、その店だったら私も行ったことある、っていう出発地点から話をふったりっていうことだと思うんだけど。(『地域のつくりかた!』支援者インタビュー・データ)

> 利用者Lさん（10代・女性）：「ぷらほ」に来た最初のころというのは、誰しも、自分がここではどういうキャラでいようかなって探っている段階だと思うんですよ。それで、他のいろんなメンバーと出会ったり「ぷらほ」に馴染んだりしていく中で、どういうキャラが自分に割り当てられているのか、それがだんだん明らかになっていく。それに、各自が自分なりの色をつけて、他の人とかぶらないキャラというものをつくり上げているんじゃないか。そういうのを、みんなが自然にやっている気がするんですね。(『ぷらほ入門2008［メンバー篇］』p.49.)

「ゲーム詳しい」ことや身につけているファッションなどから相手のキャラが定まってくれば、その人に対してどんな話題をふってよいか、またはふるべきかといった方向性をつかむことができる。また、自分についてもキャラが定まっていれば、なすべきふるまいや語るべき話題についての見当をつけやすい。このため、各自が自らの担当するキャラの要請に従いさえすれば、コミュニケーションを安定化させ、「笑い」や「楽しさ」を比較的容易に生み出すことができるのである。例えば、ある利用者はそのことを次のように述べている。

> 利用者Lさん（10代・女性）：…ある程度キャラが立ってくれば、そこに関わる余地ができてくるように思うんですよ。コミュニケーションしやすいというか。(『ぷらほ入門2008［メンバー篇］』p.49.)

> 利用者Fさん（30代・男性）：…人と話すことが、前よりは得意になったかもしれないですね。…（中略）…もてないキモオタキャラみたいなものを自分のキャラとしてまとって、そのキャラによって他人とコミュニケーションを行う。その意味で、ネタだとかふざけた話題とかでは、確かに以前より喋れるようになったかもしれない。口の動きが変わったというか、声が大きくなったというか、口先が滑らかになったというか。ある種の処世術ですよね。(『ぷらほ入門2007』p.45.)

このように、キャラには、異文脈に属する人びとにコミュニケーションの共通基盤を提供する、すなわち他者どうしを近づけるという機能がある。一方で、キャラには、それぞれのキャラが互いに「かぶらない」よう棲み分けを促すことで、人びとどうしを近づけすぎないようにする機能もまた存在する(瀬沼2009)。つまりそこには、人びとが近づきすぎず、かつ遠ざかりすぎないような、「適度な距離感」を保つための機序が備わっている。よって、〈キャラ化〉の要請に従いさえすれば、人びとは「ぷらほ」が求める高度なコミュニケーションの課題を比較的容易にクリアすることができる。このことも

また、ある利用者の若者Lさん（10代・女性）によって適切に言語化されている。

互いにかぶらないように、キャラの棲み分けができている場所。…（中略）…誰かと誰かのキャラがかぶった場合には、メンバー、スタッフ双方が、調整してうまく棲み分けできるようにしている。「ぷらほ」には距離を急に詰めてくる人がいないが、それも、お互いにキャラが重ならないように調整しているということの結果なのかもしれない。（『ぷらほ入門2008［スタッフ編］』p.31.）

キャラを演じるということは、「適度な距離感」を保ちながら「笑い」や「楽しさ」を生み出していくこと、そうやって「居場所」でのコミュニケーションの「コストを担う」ということである。この点で、〈キャラ化〉するということは、「ただ乗り」せずに「居場所」の達成に貢献しているということを意味する。そうした貢献が認められて初めて、彼／彼女は「常連」としてフリースペースの人びとに受け容れられていくことになる。このようなやりかたで、「ぷらほ」は、場のコミュニケーションを安定化させるとともに、曖昧さの保たれた空間、すなわち多様性や複数性を含みもっていながらも緩やかに統合されている場、公共性と共同性とが同時に達成されている場の構築に成功していたのだった。

4. キャラ化を促進することの意義と課題

以上、「ぷらほ」という実践事例を通じて見てきたように、「居場所」は、社会問題の当事者カテゴリーを用いる代わりに、キャラという相互行為ツールを用いることで、共同性と公共性とを同時に達成し、背景や属性の異なるさまざま人びとを一つの集まりに再統合することに成功していた。ところで、再統合や秩序化の資源として用いられているこの〈キャラ化〉という形式を、そしてそれが若者たちの「居場所」で流通しているということを、どのように評価するべきであろうか。ここでは、その意義ならびに課題についていくつか指摘しておきたい。

まずはその意義についてであるが、繰り返し述べてきた通り、〈キャラ化〉とは、若者文化と地続きであるようなコミュニケーションの様式である。瀬沼（2009）によれば、もともとそれは、ストリートへの流出などを契機に、前提を共有しない間柄でのコミュニケーションの場を生きていかなければならなくなった90年代以降の「ふつうの若者たち」が、目的性の希薄な場面において、相互行為を円滑化させたり安定化させたりするために採用するようになった一手法である。その意味で、「ぷらほ」に集う若者たちのコミュニケーションは、「居場所」の外の社会で営まれている「ふつう」のコミュニケーションと連続しているものだということができる。

だとすれば、〈当事者カテゴリー化〉―「〇〇の当事者」というアイデンティティの修得―を抑制して〈キャラ化〉を促すということには、独自の意義があるということになる。キャラとは、「ふつうの若者たち」が「ふつう」に用いるコミュニケーションのための資源であり手法である。とすると、「居場所」はそこで交わされるコミュニケーションを統制することで、彼／彼女たちを外の社会の「ふつう」に橋渡ししようとしているということになる。彼／彼女らは「居場所」において〈キャラ化〉という方法を修得することで、それらを外の社会の「ふつうの若者たち」とのやりとりの際、コミュニケーションの資源として用いることができるようになる。この意味で〈キャラ化〉とは、「居場所」から外の社会への移行につながる支援実践なのである。

とはいうものの、各所で指摘されている通り、〈キャラ化〉が問題をはらむ局面も当然ながら存在する。キャラとは、あくまでその場やその関係性限りの配役ゆえ、そこで配役が得られるかどうかは、偶然性に左右される。うまくキャラを構築できなかった場合、あるいは他の成員とキャラがかぶってしまった場合、彼／彼女はそこにはいられない。居場所とは、「キャラが立っている」または「キャラがかぶらない」ような場のことだからである（鷲田2002）。一方で、悲劇は、自らの望まないキャラを引き受けてしまったような場合にも生じる。そのとき、彼／彼女にとってその場はダブルバインドを強要され続ける「友だち地獄」（土井2008）となるだろう。

これらは、「ぷらほ」においても「内輪ネタ」または「迎合文化」（ある利用者の若者Lさん［10代・女性］の言葉）という問題として把握されている。

A：内輪ネタで盛り上がるだけの団体にはしたくない。…（中略）…そりゃあ内輪ネタは楽しいし、全部やめろとは言わないよ。でも、外部の人がいるという想像力を欠いた、歯止めのない野放し状態はよくない。（『居場所の歩きかた』支援者インタビュー・データ）

利用者Fさん（30代・男性）：最近、メンバーが「人生の勉強中」みたいな表現を使う場面をよく見かけるんですよ。それを見ると「どうなんだろう」と若干気になるんですね。…（中略）…もし「ぷらほ」にコミュニケーションの「正解」があって、それを「勉強」しに来ているんだとか、ここに来ると「正しいものの見かた」や「世の中の見かた」が身につくんだとか、スタッフはそれを心得ていてその「正解」を教えてくれるんだ、みたいに考えているということなのだとすれば、そこに、自分としては距離を感じるんですね。（『ぷらほ入門2007』p.46.）

ここで指摘されているのは、先にも触れた、閉鎖性（外部社会からの断絶・過激化）や冷却性（「居場所」そのものの自己目的化・滞留）といった共同体の弊害である。問題の根本は、その場に参加している成員の顔ぶれが固定化することで、そのまなざしによって構築されるキャラもまた固定化してしまうということにある。

だが、そうした事態に対し「居場所」が無為のまま手をこまねいているわけでは決してない。「ぷらほ」では、キャラの固定化を回避するためのさまざまな方法や工夫を発達させている。例えば、支援者の語りに次のようなものがある。

A：宗教になっちゃいかん。スタッフが同じ方向を見ていないということが、メンバーへの揺さぶりをかけることになる。Z［筆者注：ある案件］について、Bはイエスと言って、私はノーと言う。これどう思う、という問いには、Bが「a」と答えれば、私は「b」と答える、みたいな。そういう姿をここに混在させておくことで、答えがないっていう、ある意味不安定な状況をつくっている。じゃあ何だろう、とそれぞれが考える。うちは思考停止にストップをかける場所です。（『居場所の歩きかた』支援者インタビュー・データ）

ここで言われているように、支援者たちは「居場所」における関係性やそれに支えられたキャラが固定化してしまわないよう、多様性や複数性を演出することで、人びとに意図的に「揺さぶり」をかけている。

「居場所」の流動性や不安定さに関する演出は、別の形でも行われている。例えば、これまで何度も引用してきた「ぷらほ」の関係者たちの語りが収録された冊子群は、「ぷらほ」が、その内外に向けて公刊しているものである。そこには、上記のような「ぷらほ」やそのスタッフ、あるいはそれに「迎合」する人たちに対する批判的な語りも掲載されており、当然ながら、当の「常連メンバー」たちもそれを目にすることになる。これもまた「不安定な状況」である。共通しているのは、「居場所」に潜在している多様性や複数性を可視化するという方法である。先に見たように、多数性と複数性とは公共性の要件でもあるため、この方法は、公共性の契機を挿入することによる共同性の中和を意味している。

つまり「ぷらほ」では、その場が複数性に傾けばそこに同質性の契機を、同質性に傾けばそこに複数性の契機をもちこんでバランスをとるという方法が採用され、曖昧な時空間が持続的に保持されている。最終的に彼／彼女らがそのどちらか一方の極に行きつくことが目指されているわけではなく、「不安定な状況」の恒常化こそが志向されている。以上を踏まえるなら、次のようにまとめることができよう。すなわち、「居場所」とは、公共性と共同性という二つの相反する契機が均衡する場のことであり、「居場所づくり」とは、それら二つの契機を、どちらか一方に偏ることなく共存させ続けていくための、人びとの絶え間ない努力のことである。

5. おわりに

以上、「居場所」という支援空間の特徴を事例に基づいて検討してきた。そこでは、支援者と利用者とがコミュニケーションの統制—〈当事者カテゴリー化〉に代わって〈キャラ化〉というコミュニケーションの形式を用いること、またそのキャラが固定化しないよう場の不安定性を保持すること—を通じて、公共性と共同性とを併存させ、曖昧な時空間をつくりだしていた。そうした場だからこそ、何かを慰撫されながら、同時に何かに向けて動機づけられるということが、人びとの間で可能となっていた。

とはいえ、これまで見てきた「ぷらほ」の事例やそこから得られた知見が、「居場所」という支援実践の広がりのなかで、いったいどれほどの代表性や普遍性をもつと言えるか、疑問に思う向きもあるだろう。「ぷらほ」の支援実践は、社会問題にまつわる特定のカテゴリー—「不登校」「ひきこもり」など—に対象を限定するものではないため、一般的に見られる「不登校の子どものフリースクール」「ひきこもりの若者のフリースペース」といった枠組み—共同体としての「居場所」—には重ならない部分が多く、他のさまざまな「居場所」

を代表する事例とは言い難い。しかしながら、そうした一般的な「居場所」のエスノグラフィー(貴戸2005、荻野2008、佐川2009)からは、それらの内部でもさまざまなやりかたで〈当事者カテゴリー化〉を回避するための方法が模索されていることがわかる。だとすると、「ぷらほ」の方法は、さまざまな「居場所」が共通して抱える課題に正面から取り組んだ、先駆的でユニークな実践と捉えることができる[8]。そうした実践に着目し、そこで生成している価値や意味を明らかにしていくことは、質的研究が率先して取り組むべき重要な仕事である。

では、そうした先駆的事例の検討から得られた知見は、今後の若者支援の活動や政策、制度のありかたを構想していくにあたり、どのように活かされるべきであろうか。最後に、簡単ではあるが、「居場所」—公共性と共同性とがバランスを保ちつつ同居する支援空間—への着目が有する、若者支援をさらに発展させる上での意義についてふれておきたい。

第一に、「居場所」の実践への着目からは、流動性を増す社会のもとで多様な形で排除されている／いく人びとを、スティグマを伴う〈当事者カテゴリー化〉の回路を経ることなく、曖昧な存在のままで社会に包摂していくための方法やそのヒントを得ることができる。スティグマ受容が嫌で、支援ニーズをもちながらも支援空間につながれず／つながらずにいる若者たちが数多く存在する(NHKクローズアップ現代取材班2010)ということを考え合わせるなら、「不登校」「ひきこもり」「ニート」などのカテゴリーを介さずに彼／彼女らを支援のコミュニケーションへと接続できるような、社会的な回路こそが構築されねばならない。〈当事者カテゴリー化〉の実践を行わない「居場所」は、そうした回路の一つになりうる可能性を秘めている。

第二に、社会の流動性が高まっているということは、そこに生きる人びとの帰属や所属が曖昧になっていくということ、人びとがその「生きづらさ」を把握するありかたも曖昧にぼやけていくということである。そこでは、相互に輪郭の明確でない当事者カテゴリーがゆるやかに重なり合ったり隣接したりしながら林立している。その一つひとつに厳密な定義を与え、制度化した上で個別に包摂していくこと—「不登校」「ひきこもり」「ニート」の構築などがそれにあたる—は、政府予算や支援資源に限りがある以上、持続可能なやりかたとはいえない。その意味でも、多様な「生きづらさ」のなかにある人びとを、多様さのままに包摂していく発想や手法が社会的に要請されている。「居場所」がもつ公共空間としての側面からは、この問題を考える上でのヒントを入手できる。

第三に、〈当事者カテゴリー化〉の実践を伴わない「居場所」は、それらを不可欠とする専門家や当事者のつくる支援空間と比べて、支援空間を組織化する際のハードルがそれほど高くない。そこには、当該カテゴリーに関する専門家—例えば、こころの専門家—も、同じカテゴリーの人びとだけから成る共同体—例えば、ピア・グループ—も、どちらの支援資源も必要ない。「居場所」に参加する人びとにとって必要であった資源とは、専門性でも当事者性でもなく、外の社会と地続きの若者文化であった。これはつまり、若者文化にまつわる諸資源もまた、有効な支援資源となりうるということを意味している。例えば、若者たちの趣味縁(浅野2011)や地域活動のグループ(田中・萩原2012)などがそれに該当しよう。そうした場をも支援資源として正当に位置づけることができれば、私たちは、支援空間の外延をさらに拡充し、さまざまな「生きづらさ」のなかであえぐ多様な若者たちをさらに幅広く包摂していくことができるようになるだろう。

「居場所」への着目は,以上のような方向性へと支援を開いていくことでもある。

註

1. 例えば、「不登校」支援については佐川(2006、2009)、「ひきこもり」支援については荻野(2004、2007)、中村・堀口(2008)、「非正規」「フリーター」など若年不安定労働者の支援については阿部(2011)、橋口(2011)、渡邊(2012)、困難を抱える若者たち全般に対する支援については荻野(2006)、田中・萩原(2012)、中西・高山(2009)などが、それぞれの領域における「居場所」提供の実態や意義を詳細に論じている。
2. 「不登校・ひきこもりの居場所」といった呼称はそれを象徴的に示している。「居場所」が「不登校・ひきこもり」など特定のカテゴリーと排他的に結びつけられて語られがちであったことの背景には、親密圏が有する「言挙げ」の機能がある(齋藤2000、新谷2012)。公共空間から排除されたマイノリティの人びとが承認を求めて「言挙げ」する上で、外部から見てわかりやすい特定のカテゴリーなり物語なりに集合的アイデンティティを統一しておくことが、社会運動の戦略上有効である。「居場所」のなかに現実に存在する多様性は、この過程で抑圧され、不可視化されていくことになる。マイノリティの社会的排除に対する異議申立であったはずの運動が運動内部のマイノリティを抑圧してしまうという社会運動の逆説を「不登校」運動を事例に明らかにしたの

が、貴戸(2004)。

3. 相互インタビューとは、話題に応じて語り手と聞き手がスイッチするインタビューのことであり、例えばAの実践に関する話題の場合にはAが話し手、Bが聞き手となり、Bの実践に関する話題においてはBが話し手、Aが聞き手となる。

4. 以下、「ぷらほ」の「居場所」事業に関する記述は、2013年3月時点のものである。「ぷらほ」は、2013年4月より、山形県からの業務委託を受けることで、それまでの「居場所」運営の形態を大きく変容させており、それ以降の実践については、分析の枠組みを変える必要があると考える。

5. 加えて、「ぷらほ」では、フリースペースを「フリースナック」、スタッフのAを「Aママ」と、飲食店とその女性店主に例える冗談が頻繁に交わされる。個々の参加者の目的や動機が統制されない、コミュニケーションそれ自体が目的化している場であるという点で、フリースペースは「喫茶店」「スナック」などと親近性をもつ。

6. 〈当事者カテゴリー化〉〈キャラ化〉など、調査で得られた人びとの語りをもとに、そこで採用されていると筆者が解釈した方法について記す際には、〈○○○〉のように、山括弧で示すこととする。

7. 「ぷらほ」では、日常的な活動を紹介・報告したりスタッフからのメッセージを伝えたりするための媒体として、月刊の会報『ぷらっとほーむ通信』(A5判、12頁、2014年9月時点で137号まで発行)ならびに毎日更新のブログ「ぷらっとほーむのブログ「ぷらブロ」」(旧名「ぷらっとほーむ　スタッフルーム」)を稼働させている。

8. この場合、代表性や普遍性は「ぷらほ」の実践そのものというよりは、彼／彼女らが取り組んでいる課題そのもの―「居場所」において公共性と共同性をどう両立させるか―のほうにあると言えるだろう。

[参考文献]

1) 阿部真大 (2011)『居場所の社会学―生きづらさを超えて』日本経済新聞出版社
2) 新谷周平 (2012)「居場所を生み出す「社会」の構築」 田中治彦・萩原健次郎[編]『若者の居場所と参加:ユースワークが築く新たな社会』東洋館出版社:231-247.
3) Arendt, Hannah (1958) The Human Condition, University of Chicago Press.(=1973→1994、志水速雄訳『人間の条件』ちくま学芸文庫)
4) 浅野智彦 (2011)『若者の気分―趣味縁から始まる社会参加』岩波書店
5) 土井隆義 (2008)『友だち地獄―「空気を読む」世代のサバイバル』筑摩書房
6) 橋口昌治 (2011)『若者の労働運動―「働かせろ」と「働かないぞ」の社会学』生活書院
7) 古市憲寿 (2010)『希望難民ご一行様―ピースボートと「承認の共同体」幻想』光文社
8) 乾彰夫 (2010)『〈学校から仕事へ〉の変容と若者たち―個人化・アイデンティティ・コミュニティ』青木書店
9) 貴戸理恵 (2004)『不登校は終わらない―「選択」の物語から〈当事者〉の語りへ』新曜社
10) 貴戸理恵 (2005)「不登校の子どもの「居場所」を運営する人びと―それでも「学校に行かなくていい」と言いつづけるために」『現代のエスプリ』457号:164-174.
11) 中村好孝・堀口佐知子 (2008)「訪問・居場所・就労支援―「ひきこもり」経験者への支援方法」荻野達史・川北稔・工藤宏司・高山龍太郎[編]『「ひきこもり」への社会学的アプローチ―メディア・当事者・支援活動』ミネルヴァ書房:186-211.
12) 中西新太郎・高山智樹[編] (2009)『ノンエリート青年の社会空間―働くこと、生きること、「大人になる」ということ』大月書店
13) NHKクローズアップ現代取材班[編] (2010)『助けてと言えない―いま30代に何が』文藝春秋.
14) Ogino, Tatsushi (2004) Managing Categorization and Social Withdrawal in Japan: Rehabilitation Process in a Private Support Group for Hikikomorians. International Journal of Japanese Sociology, 13, 120-133.
15) 荻野達史 (2006)「新たな社会問題群と社会運動―不登校、ひきこもり、ニートをめぐる民間活動」『社会学評論』57(2):311-329.
16) 荻野達史 (2007)「相互行為儀礼と自己アイデンティティ―「ひきこもり」経験者支援施設でのフィールドワークから」『社会学評論』58(1):2-20.
17) 荻野達史 (2008)「「ひきこもり」と精神医療―民間支援活動の示唆するもの」荻野達史・川北稔・工藤宏司・高山龍太郎[編]『「ひきこもり」への社会学的アプローチ―メディア・当事者・支援活動』ミネルヴァ書房:212-238.
18) 齋藤純一 (2000)『公共性.』岩波書店
19) 佐川佳之 (2006)「不登校経験について「語らない」ということ―コミュニケーション空間としてのフリースクールに関する一考察」『一橋論叢.』135(2):258-278.
20) 佐川佳之 (2009)「不登校支援における「秘密」の機能―不登校児の「居場所」・フリースクールを事例に」『年報社会学論集』22号:222-233.
21) 瀬沼文彰 (2009)『若い世代はなぜ「キャラ」化するのか』春日出版
22) 田中治彦・萩原健次郎[編] (2012)『若者の居場所と参加―ユースワークが築く新たな社会』東洋館出版社
23) 鷲田清一 (2002)「「キャラ」で成り立つ寂しい関係」『中央公論』117(6):50-53.
24) 渡邊太 (2012)『愛とユーモアの社会運動論―末期資本主義を生きるために』北大路書房

[引用資料]

1) ぷらっとほーむ[編] (2007)『居場所がほしいあなたのためのぷらっとほーむ入門2007』(B5判、48頁)

2）ぷらっとほーむ［編］（2008）『居場所がほしいあなたのためのぷらっとほーむ入門2008［メンバー篇］』（B5判、52頁）
3）ぷらっとほーむ［編］（2008）『居場所がほしいあなたのためのぷらっとほーむ入門2008［スタッフ篇］』（B5判、52頁）
4）ぷらっとほーむ［編］（2009）『居場所の歩きかた：やまがた「不登校・ひきこもり」支援NPOガイドブック』（A5判、128頁）
5）ぷらっとほーむ［編］（2010）『地域のつくりかた!:やまがたの若者たちの地域づくりインタビュー情報誌』（A5判、144頁）

［執筆者］
滝口 克典
Katsunori TAKIGUCHI
教養教育センター
Center for Liberal Arts
非常勤講師
Part-time Lecturer